■（２６５）過去の教訓がいかされなかったブロック塀の安全策

記者が小学生のころは高度成長時代で、コンクリートが全盛だった。各地で団地や建ち、上下水道が整備され、街の風景は一気に変わった。造成された新興住宅地には真新しい家が立ち並んだ。その塀も垣根ではなく、ブロック塀が時代の最先端に思えた。

全国の小中学校にプールが整備されたのも、まさにそのころだった。子供たちを守るため回りを囲った壁もまたコンクリートブロックが多用された。その壁の一部が、大阪北部を襲った地震で倒れ、登校中の女児が下敷きになった。１９７８年の宮城県沖地震の際、住宅のブロック塀が倒れて、多くの人が犠牲になった。その反省からブロック塀の規制が強化された、はずだった。だが、学校は見落とされていたのか、今回の女児死亡事故を受けて、各地で学校の塀を調べると、基準を満たさない高さや構造の壁が相次いで見つかった。多くが宮城県沖地震の前に造られていた。登校時間帯の地震が不備を浮き彫りにした。

大災害の時、学校は避難所にもなり、まさに安全出なくてはならない場所だ。建物の耐震化や備蓄食料の確保に加え、そこに避難するまでの経路もまた安全か点検が必要だ。（山）